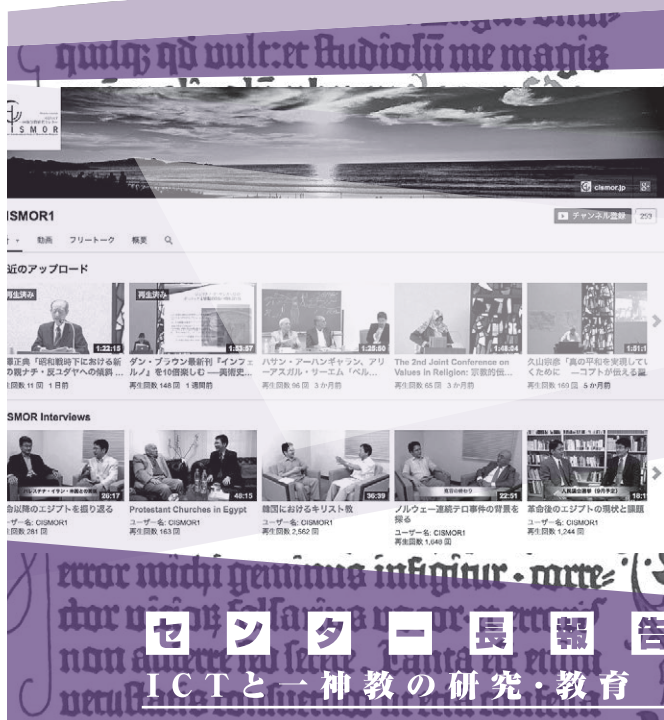




同志社大学 一神教学際研究センター
C I S M O R
Center for Interdisciplinary Studies of Monotheistic Religions



センター長報告 ICTと一神教の研究・教育

IT（情報技術）は今や広く知られる言葉となったが、ICTという言葉をご存じだろうか。先端的な情報技術を教育に生かそうとする教育関係者の間では、今やICTの方が頻繁に使われるようになっているが、それはInformation and Communication Technologyの略で、単に一方的に情報伝達・消費するだけでなく、コミュニケーションを活性化するために情報技術を用いようとする意図が含まれている。現代においては、研究も教育もICTと無縁ではられない。

ところで、テクノロジーの影響は現代に限られたものではなく、それは宗教の変遷を理解する上でも重要な視点である。たとえば、現代のICT革命に匹敵する甚大な変化を社会にもたらしたものの一つに、15世紀ドイツにおけるヨハネス・グーテンベルクによる活版印刷技術の発明がある。この新しいテクノロジーは、聖書を大量印刷し、廉価に普及する道を開くことになった。それ以前、人々の識字率はきわめて低く、一般の人が聖書を見る（読む）ことは、ほとんどなかった。16世紀にルターらによって起こされた宗教改革の理念の一つは「聖書のみ」であったが、前世紀における技術革新（およびドイツ語への翻訳）がなければ、「聖書のみ」は人々の間で、まったくリアリティを持たなかったであろう。宗教改革は新しいテクノロジーによって支えられていたのである。

一神教学際研究センターでは、その研究成果を広く社会に伝えていくために、ニューズレター『CISMOR VOICE』、学術雑誌『一神教学際研究』（JISMOR）、『一神教世界』等を印刷物として配布すると同時に、電子ファイル（PDF）としてウェブサイト上に掲載してきた。しかし、ICTの大きな進展（および経費削減）の中で、紙媒体の一部は電子版のみで公開するといった段階的な移行も行っている。また本センターでは、講演会等をYouTube動画として積極的に公開してきた。一神教（社会）という、まだ十分に理解されていない対象に対しては、そこに付きまとう誤解や偏見を取り除くためにも、正確かつ多角的な情報提供が欠かせない。

中世ヨーロッパにおいては、活版印刷技術が知の生産体制に決定的な変化を及ぼし、学問における「領域横断的なネットワーク」を創造することになった（吉見俊哉『大学とは何か』69-70頁）。今、世界の教育界ではMOOC（Massive Open Online Courses）と言われる、かつてない変化が起こりつつある。そうした状況を見据えながら、本センターの活動をグローバルな視野で展開しつつ、同時に、日本社会に対し多文化共生を考えるためのコミュニケーションを促し続けたいと考えている。

（一神教学際研究センター長 小原克博）



公開講演会

シンポジウム

研究会

報告

公開講演会

Moderate Islam and the Role of Civil Society Movements in Emerging Economies: A Case of Muhammadiyah in Indonesia

(新興国における穏健イスラームと市民社会運動の役割
—インドネシアのムハンマディーヤを事例に—)

主催：同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）

GRM（グローバル・リソース・マネジメント）プログラム

【講師】 Muhammad Sirajuddin Syamsuddin

(Professor, State Islamic University of Jakarta, President of Muhammadiyah)

【モデレーター】 中西久枝（同志社大学教授）

【日時】 2013年7月20日（土）13:30 - 15:00

【会場】 同志社大学今出川キャンパス 神学館礼拝堂

公開講演会の講師は、ムハンマディーヤの総裁を務めるMuhammad Sirajuddin Syamsuddin氏であった。Syamsuddin氏は、国立イスラーム大学イスラーム政治思想学部教授でもあり、博士号をアメリカで取得し、これまで多くの著作を執筆してきた。本講演では、主にインドネシア国内におけるムハンマディーヤの活動目標と役割について話された。ムハンマディーヤとは、1912年に設立されたインドネシアで二番目の規模のイスラームの市民団体である。ムハンマディーヤの目標は、西欧の文化を吸収してインドネシアの近代化を進めること、および、個々人のイスラーム信仰を純化することによってインドネシアのムスリムの倫理意識を高めることである。それによって、個々人の幸福が高まり、社会福祉の安定と国家の繁栄が可能になるとしている。具体的には、教育活動を通して、インドネシアの多文化主義と民主主義を推進することである。設立の1912年はインドネシア独立以前のことであり、1945年の独立に大きな力を発揮した。また、それ以後はインドネシアの国家発展に協力してきた。そのため、西欧の市民社会運動とは異なり、国家との距離が近く、その活動を助けるのが一つの特徴である。ムハンマディーヤの活動は、主に教育に重点を置いており、ほかに医療機関の運営やマイクロファイナンスの提供等を行っている。ムハンマディーヤは、インドネシア各地に1万以上の学校機関を設立運営しており、それらの学校には伝統的なイスラーム教育の学校の他に、近代的な方式のイスラーム教育の学校も含まれている。いくつかの学校では、非ムスリムも受け入れている。また、数百の医療機関も設立運営している。これらの活動は、政府の教育や医療の活動とともに

に、インドネシア各地域にて重要な役割を果たしている。インドネシアは、東アジアで四番目の経済規模をもつ国であり、目下のところ目覚ましい経済発展が進んでいる。Syamsuddin氏によれば、中国、日本、インドにつづく国家として、インドネシアは、東アジアの調和とパートナーシップの推進に貢献する必要がある。そのためにムハンマディーヤも対外的活動を行っている。たとえば、フィリピンのミンダナオ島における和平活動、タイ南部のイスラームとタイ政府の融和への協力がある。ただし、活動の中心は、これからも教育社会活動でありつづけるという。

講演会につづいて、非公開の研究会が開催された。はじめに、司会の中西久枝氏から、講演会について二点のコメントがあった。一点目は、サラフィアア概念はその意味することが多様であるという指摘である。サラフィアアはもともと、特に19世紀以降のイスラーム復興運動の主流となった、ムハンマド・アブドゥッラーに始まる思想運動である。その思想は、西洋近代文明を摂取しつつ、イスラームの再解釈を行って、本来のイスラームに立ち返り、その復興を目指すものだった。それが現在では、イスラームの過激派や軍事力を用いる集団をも含むようになってきている。二点目は、ムハンマディーヤの活動は、国内にとどまることなく、国外にも活動の幅を広げており、国境を超えているという点でグローバル社会の中で重要な意味をもつという指摘である。Syamsuddin氏は、このコメントに対して以下のように応答した。まず、サラフィアアは、アメリカの9.11テロ以降重要になっており、ジハーディズムやワッハービズムとの境界は曖昧である。サラフィアアとは、クルアーンやスンナに帰ることを



Muhammad Sirajuddin Syamsuddin氏

目指す運動であり、どのように帰るのかについての方法が問題になる。さらに、グローバルに人やモノや移動する世界にあっては、イスラームの信仰と共同体の維持発展と、他宗教や非イスラーム社会との関係が問題になるとも指摘した。この意見を皮切りに、出席者から積極的な質問がSyamsuddin氏に対してなされ、専門的な議論が行われた。そこで論点となったのは、ムスリムは世界各地に、非イスラーム社会を含めて居住しているという事実、そしてインドネシアをはじめイスラーム社会にも様々な宗教文化の人々が住んでいるという事実である。このような多文化社会にあっては、異文化や異宗教との相互理解や共生が重要である。これに関連して、ダール・アル＝イスラームやダール・アル＝ハルブの概念について、現代社会の状況を踏まえての討議が行われた。イスラーム社会と非イスラーム社会は、二つの異なる社会が併

存しているのではなく、相互に入り組んで一つの社会の中にあるという指摘もあった。また、ムスリムは世界各地に住んでいるため、イスラームの共同体は、各国の国境に限定されることはない。それゆえ、イスラームの共同体は、ムハンマディーヤのようにある主権国家の発展に貢献する側面がある同時に、主権国家の範囲を超えてイスラームの連帯を求める側面があり、この両方の側面を考えることが必要であるとの議論がなされた。そして、多様な宗教と文化が入り組んで暮らす社会の中で、多文化共生と民主主義の推進、同時に、イスラームの共同体の発展を考えることが重要であるとされた。

(CISMORリサーチ・アシスタント 藤本憲正)



左より、中西久枝氏、
Muhammad Sirajuddin Syamsuddin氏

The 2nd Joint Conference on Values in Religion

宗教における価値観をめぐる合同会議（第2回）

Conflict or Consensus among Religious Tradition and Modern Values

（宗教的伝統と近代的価値の対立と合意）

主催：同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）

カイロ大学オリエンタル研究センター

共催：同志社大学神学部・神学研究科

【スピーカー】 Mohamed Hawary (Professor, Ain Shams University)

Hanan Rafik Mohamed (Associate Professor, Cairo University)

小原克博（同志社大学教授、一神教学際研究センター長）

【日時】 2013年9月21日（土）13:00 - 15:30

【会場】 同志社大学今出川キャンパス 神学館礼拝堂

講演会は、Gamal Abd El Samea El Shazly氏（カイロ大学教授オリエンタル研究センター長）による挨拶をもって始められ、それにひきつづいて3名のスピーカーによる講演が行われた。

Mohamed Hawary氏は、“Concept of Justice in Judaism and Islam”（ユダヤ教とイスラームにおける正義の概念）と題して講演した。ユダヤ教において「正義を实践すること」ことは、創造主の意思に従って生きることである。ヘブライ語のTzedakahは英語のCharity、アラビア語のSadaqahに相当する語であり、収入の10分の1を貧しい者に施すユダヤ教徒の義務のことである。ユダヤ教において社会正義は中心的位置を占めている。ユダヤ教の理念で特徴的なのは

「責任の倫理」であり、これはsimcha（喜び、楽しみ）、tzedakah（慈悲や博愛を实践する宗教的義務）、chesed（親切な行為）、tikkun olam（世界の修復）の概念に反映されている。

ヤハウェは正義が他の国にではなくイスラエルの民の側にあることを示す。ユダヤ教は普遍的な宗教であり、ユダヤ人の選民性を主張するものでないとする声もあるが、ユダヤ人は、「神はこの地のすべての民にトーラーを授けたが、それを受け入れたのはユダヤ人だけである」、「神の目には、ユダヤ人は特別な存在として映っている」と考えている。

イスラームにおいても、クルアーンはあらゆる行為において正義の实践を説いてい



Mohamed Hawary氏



Hanan Rafik Mohamed氏

る。正義とは他者を平等に遇することである。人種、宗教、肌の色、信条の違いを越えて、友に対しても敵に対しても等しく正義を実践することを求める。社会正義を構成する要素の一例は、五行の一つであるZakat（喜捨）であり、一定の財産をもつムスリムは年に一度の喜捨が義務づけられている。Zakatは、アラビア語で「浄化する」、「成長する」を意味する単語である。Zakat以外にもSadaqah（自発的な施し）も奨励されている。人間の平等性を受け容れることと人権を認めることはムスリムに課せられた宗教的義務である。すべての人間はアダムの子孫であり、兄弟姉妹である。

Hanan Rafik Mohamed氏は「宗教的価値観と現代エジプトのヒジャーブ観」

（Religious values and the concept of Hijab in Egypt now）と題し、ムスリムへのアンケート調査を示しつつ日本語で講演した。

日本では、ムスリムの女性はヒジャーブの着用が義務づけられていると考えられているが、必ずしもそうではない。カイロ市内では、ヒジャーブを着けていない人もいし、子どもはヒジャーブをかぶらない。

ヒジャーブに関するクルアーンの節には「またあなたがたが、かの女らに何ごとでも尋ねる時は、必ず帳の後からにしろ」（クルアーン33章（部族連合）53節）とある。ヒジャーブ支持者は、すべての女性が異性と接触するとき、必ずヒジャーブしないとイケないと考え、反対者は、この節は預言者の夫人たちに限られたものであるとする。

ヒジャーブを着用していない女性へのアンケート（103名、17歳から64歳）で、ヒジャーブを着用した経験について問うと、回答は「はい」62名、「いいえ」41名であった。着用しない理由は次のようなものであった。ヒジャーブはムスリムが守るべきこととされている六信五行にも含まれていない。着用は個人の問題である。ヒジャーブのことで社会の不正から目を逸らしてはならない。道徳的なことがより重要である。「オシャレ」は宗教的価値とは別のものである。エジプト社会における女性の服装の多様性は、宗教的価値観と現代的価値観との間の争いや摩擦を反映しているのではなく、調和の一種を反映している。

小原克博氏は、「日本宗教は近代的価値観にどう向き合ってきたのか」（How have the religions in Japan been encountering the modern values?: A lesson for the post-secular age）と題して、ポスト世俗主義時代への教訓を語った。自民党の「日本国憲法改正草案」は、公の秩序を強調している。明治

憲法の第28条は、信教の自由を明文化したものであるが、公の秩序を乱さない限りという制限付きであり、宗教弾圧の道具として使われた。こう述べた上で、小原氏は以下四点について論じられた。

(1)なぜ、宗教が問題なのか

西欧社会にキリスト教が果たしている役割に驚いた明治の指導者たちは、日本が西欧の圧力に負けない近代国家になるには天皇を中心とした祭政一致が不可欠と考えた。信教の自由は、内発的にではなく、外交上の圧力によって憲法に規定された。

(2)忠誠の中心はどこに？

中世ヨーロッパにおいてそれは、教会、教皇、最終的には神であった。近代国家では忠誠の対象は国家にシフトしてきた。マーク・ジョーギンスマイヤー（Mark Juergensmeyer）の「ナショナリズムと宗教とがもつ、殉教と暴力に道徳的許可を与えるほどに、明確に中世の共通様式が現れているものは、他のどこにも存在しない」という言葉のように、世俗的ナショナリズムと宗教は、愛国心と宗教的信条によって死を正当化、美化してきた。死の美化には十分警戒する必要がある。

(3)世俗世界の限界

政教分離すれば民主化が進むのであろうか。私的と公的、宗教的と世俗的の二分法とそれに基づく政教分離では問題は解決しない。政教分離は西欧社会の中で作り上げられてきた原則であり、同じことを他の社会に適用することはできない。むしろポスト世俗主義の社会に生きていることを認識すべきである。

(4)教訓と課題

日本の場合、公共性の形成を国家が主導し、共通の善を示してきた。それは結果的に異質なものを、マイノリティーを排除してきた。公の秩序に同調させることによって、社会全体を戦争に引っ張っていったという経緯もある。他者との対話の場を積極的にもつことが必要である。3.11以降、原発問題も西欧的価値観のゆえだとして、日本と西欧を二元対立的にとらえ、日本的な価値観を強調する見方が広がっている。このような二元論的枠組みから、偏狭なナショナリズムが生まれてこないとも限らない。他を排除しないような異文化の語り方を養っていく必要がある。

（CISMORリサーチ・アシスタント 佐藤泰彦）



小原克博氏

公開講演会

ペルシア・イスラーム文化の諸相を知る ―書道と詩を介して―

主催：同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）

アルムスタファー国際大学在日事務所

共催：同志社大学神学部・神学研究科

【講 師】Hasan Ahangaran（ペルシア書道家）

Aliasghar Saem（ペルシア詩人）

【日 時】2013年10月5日（土）13:00 - 15:30

【会 場】同志社大学今出川キャンパス 至誠館3階会議室

アルムスタファー国際大学在日事務所と同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）の共同主催で2013年10月5日に公開講演会が開催された。

本講演会はイランを代表する書道家の一人であるHasan Ahangaran博士と、著名な現代詩人の一人であるAliasghar Saem氏を迎えて行われた。両氏はペルシア文化について書道と詩を通して実演を交えながら講演された。

まずAhangaran博士が、ペルシア書道について説明された。Ahangaran博士によれば、ペルシア書道には様々な書体があり、昔は75の書体があったが現在では10になっている。そのうちよく用いられるのが四つの書体、すなわち、ナスタアリーグ書体、それを崩したシェキヤステ・ナスタアリーグ書体、スルス書体、ナスフ書体である。まず、ナスタアリーグ書体は最も美しいとされる、ペルシア書道の有名な書体であり、「イスラームの書の花嫁」と呼ばれている。また、書物を書く時によく用いられる。シェキヤステ・ナスタアリーグ書体は基本的にペン習字、速記が必要な時によく用いられ、そこから発展した書体である。これら二つはイランが発祥であり、その歴史は前者が今から8世紀前に、後者は300-400年前にさかのぼる。残りのスルスとナスフはイスラーム圏で広く用いられている書体である。

また、日本の書道とイランの書道には共通点が多々見られる。その最も重要な点は両方とも書によってその書家の書こうとする内容を、美しい形で見る者に伝えようとする点である。もちろん日本の書道との相違点もあり、たとえば日本では筆を立てて使うが、イランの書道では少し斜めにして用いる。共に太く書くべき部分と細く書くべき部分があるが、イランの書道では、筆先の自分に近い側と遠い側（それぞれ

「親しい」、「野生の」と呼ばれる）を使うことでそれを書き分ける。また筆先は「舌」と呼ばれる。

そして書道を学ぶ時には三つの段階がある。まずは見ること、すなわち先生の作品の見本を見て、どのように書かれているのかを一生懸命学び取ることである。それは「見る練習」である。次の段階は筆による練習で、先生の見本を模倣してその通りに書くことである。それは「筆の練習」である。その二つが終った後、模倣ではなく自分達で書く段階となり、その段階の練習は「想像力による練習」と呼ばれる。このようなAhangaran博士による講演の後、会場にプリントが配布され、参加者がペルシア書道を実際に体験する機会がもたれた。

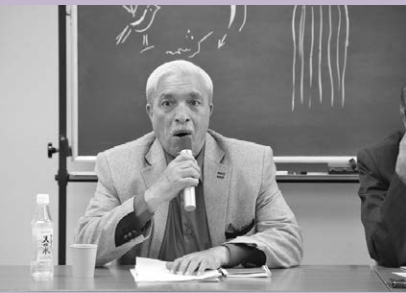
この段階でいくつかの貴重な経験が得られた。

- (1)プリントに書かれた詩は講演者の一人Saem氏の自作の詩であったこと
- (2)参加者は直接、これらの詩を詠んだ詩人の口を通して詩を聴けたこと
- (3)参加者はこれらの詩をまず一語一語、次に「メスラー」と呼ばれる節ごとに詩人の後につづいて繰り返し詠み、それによって詩の朗誦の機会も得られたこと
- (4)これらの美しい詩の意味がプリントの下部に日本語で書かれていたこと
- (5)上記の練習を体験するため、プリントには詩がまず、濃い色で書かれ、次に薄い色で書かれその上をなぞって練習できるようにしてあり、最後にそれを見ながら自分で書けるようにしてあったこと。

つづいてSaem氏が、神秘主義の様々な段階におけるペルシア文学の役割というテーマで講演を行った。まず氏は、この世の愛情と神秘主義との関係について述べた。氏によると、私欲にまみれず、貞節を汚さない、そういう愛情は、たとえそれが仮のものであるとしても、神聖さをもたら



Hasan Ahangaran博士



Aliasghar Saem氏

すものであり、神秘主義へ向かう第一歩である。仮の愛情は橋、すなわちそれを渡ることによって真実の愛情に到達出来るものである。これに関してルーミーは、人への愛に心奪われ、人を愛したとしても、最後は神への愛に辿り着くだろうと詠んでいる。

次に氏は、アッラーに至る道の道程について解説した。それには、要望、愛情、霊知・知恵、自立、タウヒード（神の唯一性）、驚き、そして消失に至る七つの段階がある。この最終段階こそが非常に美しい、至高の境地であり、そこでは何も遮るものがなく、神が顕現される。そしてこれら境地を詩人は詠んでいるのである。

さらに氏は、自身と親しい付き合いのあった、現在イランで最も有名な詩人の一人である故ソフラーブ・セパフリーとの思い出から印象深いエピソードをいくつか紹介し、彼がいかに清らかで繊細な心をもっているか、また自然と人間性というものに敬意を払っていたかを示して講演を締めくくった。

当日は、両氏によるペルシア書道の実演や詩の朗読も行われたほか、参加者との質疑応答も行われ、盛況のうちに終了した。

また講演会の後に参加者には下記のものが贈られた。

- (1)Saem氏の詩を題材にしたものを多数含むAhangaran博士の作品集のCD
- (2)書道の道具（筆、インク、紙）
- (3)博士直筆で参加者の名前を書いた美しい紙
- (4)希望者に対してAhangaran博士直筆の名前入り、また両氏のサイン入りの「ペルシア書道と文学の内面の美を知る」講演会参加証書

（CISMOR特別研究員 朝香知己）

公開講演会

ツタンカーメン王と信仰復興 —アマルナ以降のエジプト第18王朝

主催：日本オリエント学会

同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）

共催：同志社大学神学部・神学研究科

【講師】河合望（早稲田大学准教授）

【日時】2013年10月19日（土）13:00 - 15:00

【会場】同志社大学今出川キャンパス 神学館礼拝堂

2013年10月19日、日本オリエント学会と同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）の共同主催で公開講演会「ツタンカーメン王と信仰復興」が開催された。講師である河合望氏は、早稲田大学古代エジプト調査隊、米国隊などに参加し、エジプト現地での発掘調査に従事した経験をもつ。河合氏の専門は、エジプト学、エジプト考古学であり、特に新王国時代の歴史と考古学を専門とする。

講演は古代エジプト第18王朝の信仰復興を知る貴重な機会となった。まず、河合氏はツタンカーメン王の治世の重要な課題、つまり多神教の「信仰復興」から講演を始めた。ツタンカーメン治世下のエジプトで

は、大きな変革が行われた。アクエンアテン王の王子として、ツタンカーメンは子ども時代から父が導入した新しい宗教を叩き込まれた。しかしツタンカーメンは王になってからその宗教を否定し、エジプトの伝統的な多神教を再導入した。ツタンカーメン王の『信仰復興碑』には、アクエンアテンのアマルナ革命によってエジプト全土の伝統的な神々への祭祀が停止したため、神々の庇護を受けられず、国土が荒廃し、軍事遠征も失敗したと記されている。アクエンアテンが導入したアテン信仰は、他の神々を排除する「一神教」に近い宗教である。河合氏によれば、アテン信仰の背景には包括的一神教がある。アクエンアテン

は、万物の創造主は太陽神ラーであるという考えを強調し、ラー神が空に輝く日輪という形で顕在化したものが唯一神アテンであると位置づけた。それゆえに、アテン信仰の教義は（太陽の）光の神学と理解することが可能である。しかし、このアテン信仰は王による一元支配の貫徹のために利用され、民間信仰として根づくことはなかった。さらに祭祀はアクエンアテンだけが行い、公開されなかった。

アクエンアテンの死後数年してから、王子であるツタンカーテンが8歳で王に即位した。彼の治世の初めにアクト・アテン（アマルナ）からメンフィスへの遷都が行われ、テーベが再び宗教的な中心となった。それはアメン・ラー神への帰依・信仰への移行を象徴する出来事と理解できる。ツタンカーメン治世の初期（ツタンカーテンと名乗った時期）は、アテン神とアメン神の国家神としての共存が計られたが、その後、ツタンカーメンへの改名とともにアテン神は国家神としての地位を失った。彼による信仰復興は、伝統的な神々の神殿の再開と修復から始まった。そして、伝統的な神々の神像の製作と神殿への供え物も開始された。信仰復興のもう一つは、上エジプトの影響のある豪族の子どもから神官

を選出したことである。さらに強調すべきなのは、アメン・ラー神が再び国家神となるばかりでなく、ラー・ホルアクティ神、プタハ神も等しく最高神として崇拝されたことである。すなわち、一神教崇拝が破棄され、三柱の国家神が新たに導入されたのである。

ツタンカーメンの信仰復興は、伝統的な神々の神殿と貴族への富の再分配という意味をもっている。アクエンアテンの治世下に、権力や富は王に集中した。ツタンカーメンの信仰復興により、この富は再びエジプトの伝統的な神々の神殿や貴族に分配された。アテン神（一神）崇拝から三柱の国家神崇拝を中心とする多神教への変革は、様々な神と王との共存を示している。それは、伝統的なエジプトの秩序と帝国の繁栄を表すが、一神崇拝への集中を阻むものだった。

（CISMORリサーチ・アシスタント 李剣峰）



河合望氏

頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム

若手研究者による研究発表会

多文化共生時代における一神教間の相互作用と対話

主催：同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）

【発表者】松山洋平（学術振興会特別研究員、東京大学東洋文化研究所研究員）

浜本一典（同志社大学神学研究科博士後期課程）

平岡光太郎（同志社大学神学研究科博士後期課程）

神田愛子（同志社大学神学研究科博士後期課程）

【日時】2013年12月14日（土）10:00 - 17:45

【会場】同志社大学堂町キャンパス 寒梅館6階大会議室

2013年12月14日（土）、研究発表会「多文化共生時代における一神教間の相互作用と対話」が開催された。2011年度秋に採択を受けスタートした「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム」は、2014年3月に期間満了により終了する。この研究発表会は、その総括として、CISMORのプロジェクトで派遣され研究を行ってきた若手研究者らが、研究成果を発表し、意見交換を行うために企画された。

午前のセッションでは「宗教間対話の課

題に対するイスラーム学の思想的基盤」というテーマのもと松山洋平氏と浜本一典氏が、午後のセッションでは「中世と現代におけるユダヤ思想の課題—イスラームの観点を含めて」というテーマのもと平岡光太郎氏と神田愛子氏が、それぞれ研究発表を行った。また研究発表会の後、小原克博氏（同志社大学教授、CISMORセンター長）の司会で、参加者による討論が行われた。

以下は若手研究者による研究発表の概要である。



研究発表会場



松山洋平氏

松山洋平

「不信仰の地」における信仰者と不信仰者の境界—マートゥリーディー学派における宗教間対話の神学的基礎—

現代における宗教間対話の思想的基盤を考察する際、「他者」の位置づけが肝要である。ここでは宗教間対話に有効な見解としてマートゥリーディー学派の信仰論に着目する。イスラームから見た「他者」の一範疇として「不信仰の地」（イスラームの宣教が到達していない土地）や「中間時」（ひとりの預言者の教えが消滅し次の預言者が出現するまでの空白期間）の非ムスリムに焦点を当てる。アシュアリー学派は、造物主は啓示の到達によってのみ知られ、中間時に生きた民はすべての人間が例外なく救われると説き、伝承主義学派は、死後に試練を受け、楽園行きの者と地獄行きの者に振り分けられるとする見解である。どちらも現世では神を信じる義務はないという点で共通している。これに対して、マートゥリーディー学派の最大多数説では、「理性」によって造物主の存在を確認することは理性をもつすべての人間の義務であり、たとえ「不信仰の地」においても、造物主の存在を信じなかった者は救済に与らない。

しかし、「不信仰の地」の人間は、イスラームの教義を信じずイスラームの法的義務を果たさずとも、造物主への信仰の一点をもって「真の信仰者」として認められる。つまり「不信仰の地」においては、ムスリムと非ムスリムの区別は意味をなさず、一神教徒と多神教徒が区別される。すべての一神教徒は有効な信仰を共有する「信仰者」とされる。「無名のキリスト者」のイスラーム版を見ることができる。ここに宗教間対話の一つの地平を見出すことができる。

浜本一典

「キリスト教とイスラームにおける信教の自由—対話の重要性と合意の可能性—

世俗的な人権理解において、信教の自由は人間にとって最も根源的な権利とされている。しかし、多くのムスリム諸国は国際人権法の定める信教の自由に反対している。その理由は、背教に関して国際人権法がシャリーアの伝統的解釈に違背していることに加え、信教の自由が相対主義に立脚していることである。

相対主義に対する警戒心は、キリスト教にも同様に見られる。実際、今日では信教の自由を肯定する諸教派においても、20世紀前半までは否定的な見解が支配的であつ

た。カトリック教会は第二バチカン公会議で信教の自由を認めたが、これは、相対主義の帰結としての信教の自由と、人間の共存のために必要な信教の自由を区別した結果である。プロテスタントにおいても、北米の一部の州を除き、信教の自由は無神論を含意するものとして拒否されてきた。だが、第二次大戦への反省とエキュメニカル運動が流れを変えたのである。

背教に関して、伝統的なイスラーム法学は、ハディースに基づいてムスリムの背教者に死刑を科してきた。この解釈が現在でも多数説であるが、近代以降、これに反対する者が増えている。その根拠は、クルアーンが説く、信仰における強制の禁止の原則と、敵対的な異教徒と友好的な異教徒を区別するという原則である。これによると、背教者に政治的な悪意がない限り、処刑せず、神の裁きに委ねることになる。

この新しい解釈が主流になれば、平和的共存のための信教の自由がイスラームにおいても認められることになる。しかし、ムスリムが背教に関して頑なな態度をとる背景には、西洋列強の植民地支配と手を携えてなされたキリスト教の宣教活動に対する反発もある。このような不信感の払拭が、両宗教間の対話における課題の一つである。

平岡光太郎

「マルティン・ブーバーの聖性理解—『民と地のあいだ』を中心に—

マルティン・ブーバー（1878-1965）の『民と地のあいだ』（*Bein 'am le-artso*, 1944）は、当時パレスチナで主流となりつつあった政治シオニズム（ユダヤ人の国民国家創設）の主張に対する代案としてブーバーが提案したものである。

ブーバーは、一般的なナショナルな考えと、シオンという地名を冠するナショナルの考えを比較して、シオンは「聖なる」民と「聖なる」地の交わりであると言う。彼は、自然の中に生きる部族に見出される原始的な概念として、民と地に関わる聖性を考えた。諸部族一般とイスラエル部族の違いは、神自身が民と地を直接選び、この二つを結ぶ際に聖性を付与することである。ブーバーの主張は、民と地の統一をなす国民国家機構を求めたパレスチナのユダヤ人に対する、聖書の観点からの諫言と見なすことができる。

ブーバーは、イスラエルの地の獲得の重要性が三段階の議論でなされるとする。第一段階は、その地でなければ、この民が自身の実存に至ることができない。第二段階



浜本一典氏

は、この地においてのみ、自身の業、精神／霊を創生する自由な機能を見つけることができる。第三段階は、再び聖性を受け継ぐためにその民がその地を必要とする。彼は、ハラブ・クックを、第三段階を他の二段階との関係を保ちつつ最も包括的に捉えたと評価する。

ブーバーは、パレスチナのアラブ人との平和運動グループに関わり、そこにおいてユダヤとパレスチナの二民族一国家論を説いた。ブーバーにとっては、パレスチナの地にユダヤ人国家ができることよりも、聖書以来のユダヤの伝統に従った聖性によって、民と地が結びつくことが重要であった。

神田愛子

「マイモニデスとカラーム—キリスト教神学に対する批判を中心に」

モーセス・マイモニデス（1138-1204）は、コルドバでラビの子として生まれた。ヨーロッパのキリスト教会を背景にした権力闘争はイベリア半島へも波及し、「レコンキスタ」の影響によりイスラーム勢力とキリスト教勢力の狭間でユダヤ人が翻弄された時期であった。その間、イスラーム王朝の変遷の中にイスラームの神学的かつ思想的対立が絡んでおり、その背景にキリスト教の護教神学があると彼は指摘している。

アラビア語で「神学」を意味する「カラーム」（kalām）の語源は、ギリシア語の「ロゴス」に由来するが、ここから派生した「ムタカッリム」は、護教的な論説を行う学者を指すようになった。マイモニデスは、カラームは論証に基づかず、まず結

論ありきの議論であると批判している。

マイモニデスは、キリスト教に対して非常に批判的であった。彼は『迷える者の手引き』（*Dalālat al-hā'irīn*）第1部50章で、「もし、誰かが神は唯一であると信じ、しかしある数の本質的偶有を持つとするならば、その者は口では神は唯一と言いつつ、思いの内では神は多くあると信じているのである」とし、キリスト教の三位一体説に否定的見解を述べている。

イスラーム神学における神の唯一性の概念とこの概念に負うものの議論に関して、ユダヤ教徒の中でもゲオニームやカライ派はムウタズィラ派が採用した見解をある点では負うようになったが、それはムウタズィラ派の見解を論証により証明されたものと見なしたからだともマイモニデスは論じている。彼は『手引き』第1部71章で「イスラーム教徒のすべての言明は、すべて哲学者の見解に対抗し、彼らの言明を否定しようとしたギリシア人やシリア人の書物から採られた前提によって構築された見解である」と述べ、イスラームのカラームは、すべてキリスト教の護教神学者に源泉をもつと考察している。

今後の方向として、マンチェスター大学に提出した『イスラーム初期のキリスト教とイスラームの神学対話』と題した修士論文を用い、イスラーム神学に影響を与えたキリスト教の護教論をマイモニデスがどのように受け止め、それが彼のイスラームとキリスト教に対する評価にどう影響したのかにつき研究を深めていきたい。

（CISMORリサーチ・アシスタント 佐藤泰彦）



平岡光太郎氏



神田愛子氏

公開講演会

昭和戦時下における新聞の親ナチ・反ユダヤへの傾斜 —それに同調できなかった人々

主催：同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）

共催：同志社大学神学部・神学研究科

【日時】2014年1月26日（日）13:00 - 14:15

【講師】宮澤正典（同志社女子大学名誉教授）

【会場】同志社大学今出川キャンパス 神学館3階礼拝堂

2014年1月26日（日）、宮澤正典氏（同志社女子大学名誉教授）による公開講演会「昭和戦時下における新聞の親ナチ・反ユダヤへの傾斜—それに同調できなかった

人々」が開催された。本講演において宮澤氏は、昭和戦時下において新聞が親ナチ・反ユダヤへと傾斜していく様子を数々の史的資料を参照しながら説明された。



宮澤正典氏

日本の歴史の中でユダヤ人が隣人として存在したことはほぼなかった。そういう意味では日本にはユダヤ問題はなかったといってもよい。日本政府は、1933年にドイツからのユダヤ人避難民への対応に関して国際連盟から問い合わせを受け、ロシア革命での白系ロシア人避難民と同様に条件つきで入国を認めるとした。その後、政府は1938年の「猶太人対策要綱」でユダヤ人を他国人と同様に公正に取り扱うと明示した。この対策要綱は1942年に廃止され、より厳しい内容の「時局ニ伴フ猶太人対策」が決定されたが、独伊の排ユ政策とは異なり、国是たる八紘一宇のもとユダヤ人は無国籍人として扱うにとどまっている。

大正時代になると、日本にもユダヤ問題が現われる。シベリア出兵の際、ユダヤ人による世界転覆、ユダヤ人世界建設の陰謀の計画書とされた『シオン長老の議定書』が日本にもちこまれた。一部の軍人は大正デモクラシーに反対するため、この『シオン長老の議定書』にもとづいてデモクラシーは英米の策略であると主張し、ユダヤ論議を立ち上げた。これに対して吉野作造が反論するなど、この時期ある種の反ユダヤ主義をめぐる論議があったが、新聞がそれを主題にすることはほとんどなかった。

しかし昭和に入りナチスが登場すると、新聞は熱心にこれを取り上げるようになる。日本のジャーナリズムは、1933年段階ではナチスに厳しい批判を向けていたが、1935年にそれは大きく転換した。たとえば朝日新聞1935年1月27日付夕刊の第1面は、ほとんどが黒田礼二とヒトラーの会見によって占められている。国家元首就任以来、ヒトラーが会見した外国の記者は黒田が三人目であった。この出来事は朝日新聞とヒトラーとのあいだに關係が構築されたことを意味する。この年を契機に日本のジャーナリズムは、新聞に登場する学者や文化人も含め、ドイツやヒトラーの賛美に転換した。たとえば大阪毎日にはヒトラー・ユーゲントの日本招聘を主導したほか、反ユダヤ關係の講演会や展覧会をたびたび開催した。日独伊三国同盟が賛美され、ヒトラーの演説もたびたび紹介されたが、それに対する批判はまず行われなかった。またイタリア降伏の際には、キリスト教国英米のローマ爆撃はユダヤ人とフリーメーソンの計画であるとする社説が掲載され、イタリア降伏によってドイツは重荷を下ろしたという軍人らの論理もくりかえし紹介された。この親ナチへの傾斜は反ユダヤにも転じた。日中戦争はユダヤ人と共産主義から極東を救う聖戦と位置づけられ、ユダヤ人

問題は対岸の火事ではないとされた。すなわち、中国の背後には英米（＝ユダヤ）があり、そのことを見抜かなければ日中の關係は理解できないというのである。こうして新聞は、新秩序をつくるために断固ユダヤ＝英米を打倒すべしという論調で占められるようになった。

このような中、杉原ビザによって日本人は1940年に集団としてのユダヤ人とはじめて接した。新聞はこの時の様子をかなり忠実に紹介しているが、市民が反ユダヤ的な態度をとったという記事はほとんど見出せない。つまり市民は違和感をもったにせよ、基本的にはユダヤ人に同情的であった。新聞もここでは反ユダヤを煽ったとはいえない。しかし新聞にはあきらかに反ユダヤ的な影も認められ、観念的なユダヤ觀を織り込んだ報道も見られた。その後、ユダヤ人が上海に渡りほぼ姿を消すと、新聞は観念のユダヤ人像を弄ぶようになった。

一方、こうした親ナチ・反ユダヤ的傾斜に同調しなかった人々も存在した。清沢冽は、『暗黒日記』の中で新聞を痛烈に批判し、そのユダヤ論に反論している。また1938年、ユダヤ人避難民が満州国から入国を拒否された際、樋口季一郎は当時の関東軍參謀長東条英機に対し人道問題として受け入れるべきだと主張し、入国を認めさせている。

以上の宮澤氏による講演の後、非公開研究会“Jews and Judaism in Japan”（日本におけるユダヤ人とユダヤ教）が行われた。研究会では、Ada Taggar-Cohen氏（同志社大学教授）の“Introduction to the research”、高尾千津子氏（立教大学研究員）の「日本統治下ハルビンのユダヤ人社会 1930-40年代」、佐藤泉氏（東洋学園大学教授）の「在日ユダヤ人コミュニティの歴史—長崎、神戸、横浜、軽井沢、東京」、市川裕氏（東京大学教授）の「日本人にとってのタルムード翻訳の意義」、勝又悦子氏（同志社大学助教）の「最近のユダヤ關係の出版事情」、そしてDoron B. Cohen氏（同志社大学嘱託講師）の“Being Israeli in Japan”の6つの発表があり、活発な議論が展開された。

（CISMOR特別研究員 朝香知己）



研究会会場

2013年度後半 活動報告

主催イベント

【国内開催】

2013年10月5日（土）

▼公開講演会

「ペルシア・イスラーム文化の諸相を知る―書道と詩を紹介して」

講師：Hasan Ahangaran（ペルシア書道家）

Aliasghar Saem（ペルシア詩人）

会場：至誠館3階会議室

共催：アルムスタッフアー国際大学在日事務所

2013年10月19日（土）

▼公開講演会

「ツタンカーメン王と信仰復興―アマルナ以後のエジプト第18王朝」

講師：河合望（早稲田大学高等研究所准教授）

会場：神学館礼拝堂

共催：日本オリエント学会

2013年12月14日（土）

▼非公開研究会

【頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム総括研究会】

「多文化共生時代における一神教間の相互作用と対話」

発表者：松山洋平（学術振興会特別研究員）

浜本一典（同志社大学神学研究科）

平岡光太郎（同志社大学神学研究科）

神田愛子（同志社大学神学研究科）

会場：寒梅館6階大会議室

2014年1月26日（日）

▼公開講演会

「昭和戦時下における新聞の親ナチ・反ユダヤへの傾斜―それに同調できなかった人々」

講師：宮澤正典（同志社女子大学名誉教授）

会場：神学館礼拝堂

▼非公開研究会

「Jews and Judaism in Japan」

発表者：アダ・タガー・コヘン（同志社大学教授）

高尾千津子（立教大学研究員）

佐藤泉（東洋学園大学教授）

市川裕（東京大学教授）

勝又悦子（同志社大学助教）

ドロン・B・コヘン（同志社大学嘱託講師）

会場：神学館G31教室

2014年1月29日（水）

▼公開講演会

「ダン・ブラウン最新刊『インフェルノ』を10倍楽しむ―美術史および宗教学の視点から」

講師：竹下ルッジェリ・アンナ（京都外国語大学准教授）

小原克博（同志社大学教授）

会場：神学館礼拝堂

共催：同志社大学大学院博士課程教育リーディングプログラム：グローバル・リソース・マネージメント

（GRM）

【海外開催】

2013年10月10日（木）～11日（金）

▼国際ワークショップ in コネチカット、アメリカ

「Islamic Law and Ethics in the Multi-Religious World」

会場：ハートフォード・セミナリー

2013年10月26日（土）

▼ジョイントセミナー in クアラルンプル、マレーシア

「Shariah, Governance and Interreligious Relations」

会場：マレーシア国際イスラーム大学

2013年12月30日（月）

▼国際シンポジウム in エルサレム、イスラエル

「“Theocracy” and “Nation” in Jewish Thought: Past and Present」

会場：エルサレム・ヘブライ大学

共催イベント

2014年3月6日（木）

主催：早稲田大学重点領域研究機構アジア・ムスリム研究所

▼公開講演会

「ハラール食品のグローバリズム：イスラームとハラール市場に対する政府の規制」

講師：Johan Fischer（ロスキレ大学准教授）

Florence Bergeaud-Blackler（地中海ヨーロッパ比較民族学研究所主任研究員）

会場：神学館礼拝堂

来訪者記録

2013年10月

Hasan Ahangaran

ペルシア書道家（イラン）

Aligaghar Saem

ペルシア詩人（イラン）

澤田達一

アルムスタファー国際大学在日事務所、研究教務部長

モダヴァッリヤン・モハン・マドアリー

アルムスタファー国際大学在日事務所、所長

河合望

早稲田大学高等研究所、准教授

2013年12月

水谷周

アラブ・イスラーム学院、学術顧問／日本ムスリム
協会、理事

勝畑冬実

立教大学、非常勤講師

2014年1月

佐藤泉

東洋学園大学、教授

竹下ルッジェリ・アンナ

京都外国語大学、准教授

2014年2月

Abdullah Al-Durain

Office of Mrs. Hayat Abdulatif Jamil（サウジアラビア）
所長

下村佳州紀

黎明イスラーム学術文化振興会、代表理事

Jabasini Muhammad

黎明イスラーム学術文化振興会、理事

2014年3月

Johan Fischer

ロスキレ大学（デンマーク）、准教授

Florence Bergeaud-Blacker

地中海ヨーロッパ比較民族学研究所（フランス）、
主任研究員

小島宏

早稲田大学アジア・ムスリム研究所、所長

野田仁

早稲田大学アジア・ムスリム研究所、次席研究員

C I S M O R 最新情報を発信中です

<http://www.cismor.jp>

過去の公開講演会の動画をはじめ、ニュースや
出版物などが、ご覧いただけます。

発 行	同志社大学一神教学際研究センター(CISMOR)	TEL 075-251-3972 FAX 075-251-3092
	〒602-8580 京都市上京区今出川烏丸通東入	E-mail info@cismor.jp
編 集	CISMOR事務局編集部	デザイン 高田太